

(特選)

☆木漏れ日の古刹の庭や竹の春

忠男

竹は筍の生える四月から五月にかけて栄養分が奪われ、勢いが衰える。それが秋になると元気を取り戻し、元の状態に戻り緑が鮮やかになる。これを竹の春という。歴史のある名刹の庭の傍らに木漏れ日の差す竹林があり、今まさに竹の春である。格調のある秀句である。

・過ぎし日の淡き郷愁秋桜

邦夫

コスモスがあるか無きかの風に揺れているのを見ていると、ふと若き日を懐かしむ気持ちにかられる。コスモスを沢山栽培している畑の情景が目には浮かぶ。中七の『淡き郷愁』に作者の思いが籠っている。

・百幹の生々として竹の春

玄舟

竹林があり、沢山の竹が天に向かって伸びている。時折、風に吹かれて爽やかな音を立てている。中七の『生々として』で竹の春を真正面から詠み止めた。竹林の情景が目には浮かぶ優れた写生句。

(入選)

- ・素描する柿山盛に子規忌かな
- ・ひぐらしや災害死への鎮魂歌
- ・露けしや碑残る渡し跡
- ・雨晴れて心も晴れて竹の春
- ・乳飲み子の満面の笑み天高し

たか志
良月
繁好
良月
けんじ

(佳作)

- ・竹の春手繋ぐ吾子と深呼吸
- ・枕草子の淡きかな文字秋思あり
- ・水琴窟の音響きをり竹の春
- ・色増して採り入れ時期や唐辛子
- ・直会と言ひて酒酌む瀬祭忌
- ・窓たたく野分の雨に目覚めけり
- ・翺雲友は遠くに逝きにけり
- ・断捨離は道半ばなり瀬祭忌
- ・雲抱きて富士そびえ立つ秋の声
- ・盆東風に淡き期待の術後かな
- ・マスクしてぎよる目鋭き案山子かな
- ・静寂の古刹の庭や竹の春

よしまさ
一江
かつを
邦夫
進
たか志
忠男
邦夫
一江
けんじ
進
繁好